

佛教大学 歴史学部論集 第7号 (2017年3月)

17世紀初期京都における地域意識

——17世紀初期板行絵図の分析から——

渡 邊 秀 一

〔抄 録〕

本稿は17世紀初期に刊行された「都記」と後継二鋪の板行京都図の分析を通して、17世紀初期京都の地域意識とその変化について検討したものである。「都記」は慶長期後半から寛永初期までの内容が重層化している点、市街の北限を一条通に設定した点に大きな特徴がある。一条通に都市空間を分節する境界を設定することは、初期洛中洛外図屏風にすでに現れている。しかし、「都記」では平安京を旧左京域にまで限定し、その外側を排除する態度をみせている。慶長期後半から寛永年間初期にかけて進んだ内裏域や公家町の整備、急速な京都市街の拡大を背景に、旧平安京左京域の外を他者として、旧左京域こそが平安京を継承する正当な都であるというメッセージを発しているのである。後継の二図はこの「都記」の地域意識を受け継ぎながら、記載範囲を若干拡大している。平安京から徳川政権下の「京」へと意識が変化しつつあることがそこらうかがえるのである。

キーワード 京都、都市図、初期洛中洛外図屏風、平安京、地域意識

はじめに

本稿の目的は、17世紀初期に刊行された京都の都市図の分析を通して、当該期における地域意識を検討することである。江戸時代の都市図は作成方法によって手書絵図と板行（刊行）絵図に大別される。手書による都市図の多くは政治的・行政的な目的、例えば土地・屋敷の管理を目的に作成されたものなどであり、主題図が多い⁽¹⁾。これに対して板行の都市図は商業目的の刊行物である。それゆえに、主題図的な都市図とは異なり、多様な情報を含む汎用的な、トポグラフィックな性格をもった都市図であり、需要に応じた柔軟な情報の加除・修正も行われている。17世紀初期に刊行された京都の都市図は近世における板行都市図の嚆矢と位置づけられ、17世紀中期以降に活発に刊行されるようになると名所案内的要素を強く帯びるようになったと言われている⁽²⁾。それこそ板行都市図の特色をよく表しているものであろう。しかし、

17世紀初期の板行京都図の内容は、汎用性をもった、トポグラフィックな絵図であろうとする板行絵図の特性と相反するものになっている。そこに作成者や需要者たちが共有する意識が垣間見えてくると思われる。

小野寺は絵図について「絵図は過去の景観をあるがままに描いたものではない。絵図に描かれた景観は、作成主体がその目的によって、あるがままの景観から取捨選択した図像、あるいは価値体系によってイメージ化された図像である。」と言った⁽³⁾。これは景観に焦点を当てた言い方であるが、絵図がもつ主観性は景観だけに現れるものではない。絵図の作成動機あるいは目的といったものがすでに主観的である。それゆえに、絵図を通して「共同体の中でのイメージが他者を想定することで変容し、自己のアイデンティティが同時に形成される様相」を見ることができ、土地の景観を視覚的に表現した絵図が「共同体としての都市空間を表象すると同時に、そこに住まう人々の心性を顕在化させる」といった理解も成り立つことになる⁽⁴⁾。本稿も17世紀初期に刊行された京都図をトポグラフィックな図として見るのではなく、京都に住む人々のアイデンティティあるいは心性の表現ととらえ、17世紀初期の京都の人々の地域意識をとらえてみたい。

1. 17世紀初期板行京都図の相互関係

(1) 17世紀初期板行京都図群

17世紀初期に刊行された都市図には、京都図を含めて刊記がないことが多い。京都図の場合、刊記を記載する絵図は慶安5（1652）年刊行の「新改洛陽并洛外之圖」である（表1）。しかし、京都図には類似の板行都市図がいくつかあり、記載範囲の相違や記載内容に基づく年代比定から、作成時期の前後関係が表1のように推定されている。表1は大塚隆の整理に基づき、「平安城東西南北町并之図」に関わりの深い京都図の図題・識語などを一覧にしたものである。

表1・No.1の「都記」（京都大学附属図書館所蔵）は「寛永平安古図」の異称をもち、現存する江戸時代の都市図として最古のものとされている⁽⁵⁾。記載範囲の北端は一条通、南端は七条通で、東は寺町・下寺町、東本願寺寺内東洞院通まで、西はほぼ大宮通まで、一部で日暮通の町並も記載されている。市街周辺の寺社に関しては全く記載がない。また、異称から推察できるように、これまで寛永元～3年（1623～1625年）の作成と推定されてきた⁽⁶⁾。

洛外の寺社が描かれるようになるのは表1・No.2図「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖⁽⁷⁾」以降になってからである。表1の備考欄に記したように、洛外寺社の記載は洛東から洛北・洛南に広がり、No.4図で洛西が加わってくる。またNo.2図の記載範囲の北限は「本立賣」、すなわち上立売通で、南端は九条が点描されているが、事実上はNo.1図と同じ七条通までである。また、市街西部には大きな変化はみられない。これに対して、東側の町並は寺町から鴨川を越えて栗田口まで、洛東の建仁寺通（大和大路通）・伏見街道に沿って東福寺付近まで延びてい

表1 17世紀初期に刊行された京都図

No.	図題	刊記	識語	備考
1	都記	—	疇昔ノ京ノ條通小路種々雖トモ有ト 當京ノ條通厨子小路町ノ名付如此也	無彩色。 京屋敷より慶長15 (1610) 年以降、 二条城の形態から寛永元 (1624) ～3 (1626) 年と推定。
2	平安城本立賣 ヨリ九條迄町 並之圖	—	當京ノ條通厨子小路町名付如此新板 開者也	無彩色。洛東・洛南の寺社を点描。 島原の記載がない点から、寛政 18 (1641) 年以前作成と推定。
3	平安城東西南 北町并之圖	—	當京ノ條通厨子小路町名付如此新板 開者也	無彩色。洛東・洛南・洛西の寺社 を点描。
4	平安城東西南 北町并之圖	—	當京ノ條通厨子小路町名付如此新板 開者也	無彩色。島原・高瀬川舟入・東本 願寺下屋敷を記載。 寛永18 (1641) ～慶安5 (1652) 年と推定
5	平安城東西南 北町并之圖	—	當京ノ條通厨子小路町名付如此新板 開者也	無彩色。4 図の別版で、3 図近い 内容をもつ。
6	平安城東西南 北町并之圖	慶安5年 (1652)	當京ノ條通厨子小路町名付如此新板 開者也	無彩色。3 図と酷似の版木の一部 を改刻。刊記上に「新板」と刻す。
7	新改洛陽并洛 外之圖	承応2年 (1653)	古より京ノ圖板行多シといへとも町 之名違多シ、其上柳原、安居院、西 陣、北野、大佛、六條之新屋敷者繪 圖ニ無之故、今度其町町之名を悉ク 聞立、凡町數千四百八町之名付如此、 此外洛外ノ名所舊跡山川通路迄改、 新板ニ開者也	淡色手彩絵図。題に「洛外」と付 加。町名検索式図から観光を含む 多目的な図への萌芽。
8	新板平安城東 西南北町并洛 外之圖	承応3年 (1654)	此圖世に四版ありといえも御公家衆 名所無之、一二三付を以公家屋敷不 殘令書付者也、洛外の名所舊跡方角 或ハ山川道筋相違有之仍此度粉骨を つくし其所々を考あらためて令開板 者也	手彩色。公家屋敷を詳細に記載。

資料 大塚 隆 (1981)『京都圖總目録』(日本書誌学大系18), 青裳堂書店。

注 表中の備考は大塚に基づく。

る。刊記がないためNo.4 図の作成時期は明らかではないが、秋岡や大塚は寛永18 (1641) 年以前と推定している⁽⁸⁾。

表1・No.3 図の「平安城東西南北町并之圖⁽⁹⁾」は記載内容がNo.2 図の「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」とほぼ同一である。No.3 図がNo.2 図と異なっている点は、No.2 図が洛外寺社の絵画的表現を一部の寺社にとどめ、相当数の寺社を方形で囲みこんだ文字注記で記載しているのに対して、No.3 図は洛外寺社のすべてを絵画的に表現していることである。市街部分でも一部の文字表記の配置が異なっており、洛外寺社の表現を改める際に新刻されたものと思われる。図題の変更もそれによって生じたものであろう。

No.4 図は寛永18年に東本願寺に寄進された東洞院通以東の新寺内の地に本願寺下屋敷 (現、渉成園) と新寺内の町々を描いている。このことから、No.4 図は寛永18年以降に生じた町並の

変化とNo.3図で記載されなかった高瀬川と舟入などを書き加えたものであると考えて間違いない⁽¹⁰⁾。また、No.5図およびNo.6図は表1備考欄に記載した通り、No.3図の内容を受け継いでいる。ところがNo.7図になると、図題や記載の範囲・内容が改められ、墨色から彩色図へと変更されている。こうした大幅な変更が加えられたという点では、No.3～6図の図題を継承するNo.8図も同じである。

No.2図の内容がNo.3図に受け継がれ、No.4～6図はNo.3図の後継図である。No.2図からNo.6図に至るまでに板行京都図は記載範囲を徐々に拡大し、それとともに絵画的表現による寺社の点描数を増やし、また記載から漏れた地物や新たに出現した地物を加えるなどして、たびたび改訂されている。しかし、それらは記載情報の追加であって、既存内容の更新ではない。したがって、No.2図からNo.6図は同一系統に属する絵図群とみなすことができ、No.7図から京都図の記載内容が大きく変化したと言ってよい。

（2）17世紀初期板行京都図群の内容的関係

現在知られている範囲では「平安城東西南北町并之図」に先行する絵図は2鋪（表1、No.1・No.2）であるが、内容的にみれば「都記」一つである。図1は「平安城東西南北町并之図」のトレース図の上に「都記」の記載範囲を示したものである。よく知られているように、「都記」に記載されているものは墨色で塗りつぶされた街区と町名・街路名、相国寺や仏光寺、東西本願寺、そして寺町・下寺町の寺院名のほかは、ほとんどが武家の京屋敷・宿所である。大塚はこうした記載内容の特徴をとらえて将軍の上洛にともなって諸国から参集した諸大名や家臣団などに向けて刊行された「町名便覧図」とみなした⁽¹¹⁾。大塚が「都記」の作成時期を寛永元～3年と推定したのは、二条城の形態が寛永期の拡張後と同じであることに加え、武家の京屋敷・宿所が記載されているためである⁽¹²⁾。

この京屋敷に着目し、「都記」（表1、No.1）、「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」（表1、No.2）、「平安城東西南北町并之圖」（表1、No.3）に記載された京屋敷を一覧にまとめたものが表2である。「都記」に記載された京屋敷・宿所は36邸、同写では桑山伊賀を書き漏らしているため35邸である⁽¹³⁾。これに対して「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」は「都記」に記載されていた蒲生飛驒守・生駒讃岐守邸の記載がなく39邸、「平安城東西南北町并之圖」ではこうした書き漏れはなく、41邸になっている。「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」・「平安城東西南北町并之圖」で記載数が増えたのは、寺町以東の地域が描写範囲に入っているためである。表1から明らかな通り、「都記」記載の京屋敷は「平安城東西南北町并之圖」にそのまま記載されている。したがって、「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」とは「都記」の内容をそのまま受け継ぎながら、記載範囲を一条通から上立売通まで北に、寺町通から大和大路通・伏見街道まで東に拡大し、洛外寺社を書き加えた京都図である。また、「平安城東西南北町并之圖」は「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」の情報を受け継ぎつつその遺漏を補ったいわば

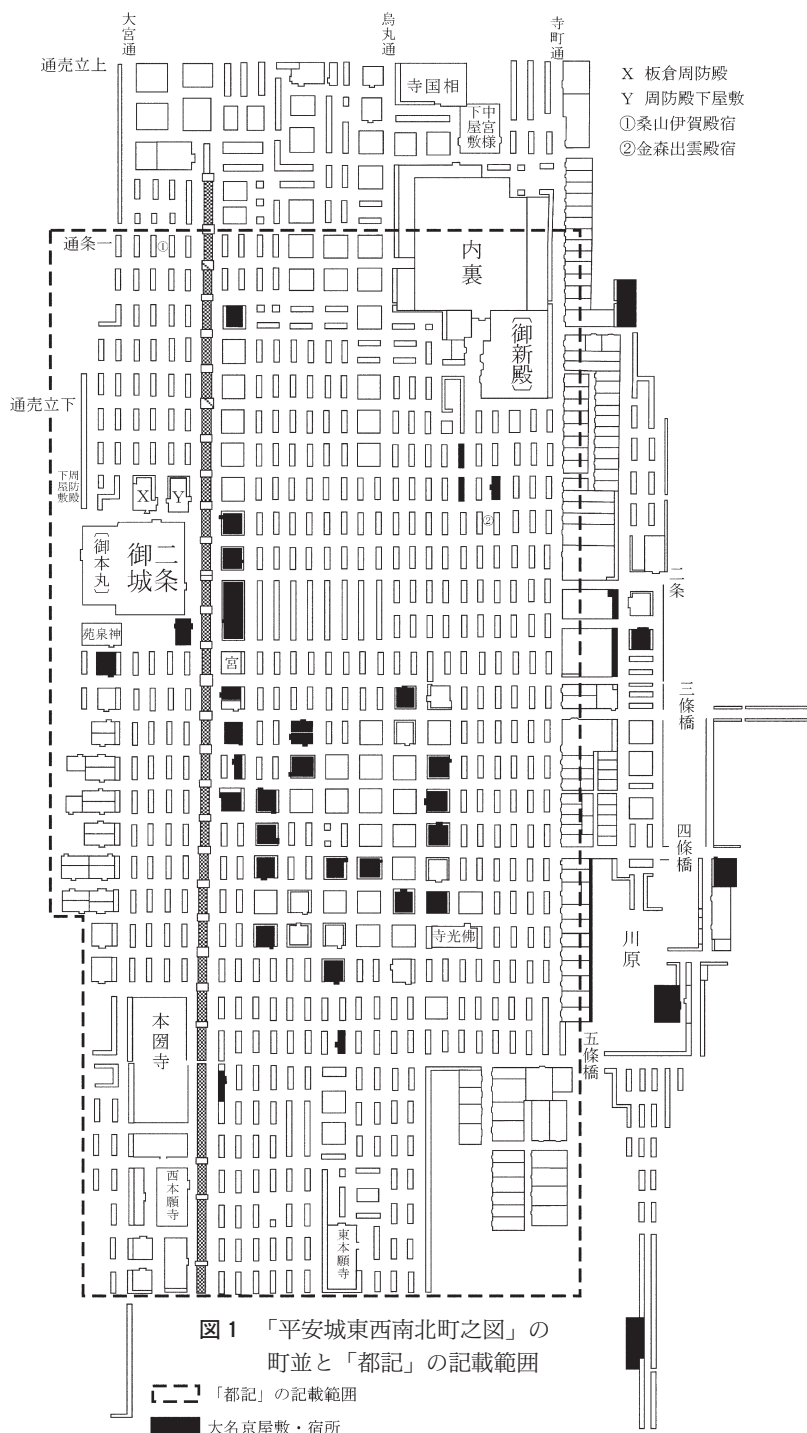


図1 「平安城東西南北町之図」の町並と「都記」の記載範囲

〔 〕 「都記」の記載範囲

■ 大名京屋敷・宿所

「都記」範囲内の〔 〕内は「平安城東西南北町並之図」の注記。

表2 絵図に記載された京屋敷

	都記(京大図書館本)	本立売ヨリ九條迄	東西南北町井之図	記載された武家
1	板倉周防殿	板倉周防殿	板倉周防殿	京都所司代板倉周防守 重宗
	周防殿下屋敷	周防殿下屋敷	周防殿下屋敷	
	周防殿下屋敷	周防殿下屋敷	周防殿下屋敷	
2	板倉伊か殿宿	板倉伊加殿宿	板倉伊賀殿宿	板倉伊賀守勝重
3	松平右衛門殿宿	松平右衛門殿宿	松平右衛門殿宿	松平右衛門佐（大夫） 正綱（正久）
4	坂井雅楽殿宿	酒井雅楽殿宿	酒井雅楽殿宿	酒井雅楽頭忠世
5	土井大炊殿宿	土井大炊殿宿	土井大炊殿宿	土井大炊頭利勝
6	小堀遠江殿宿	小堀遠江	小堀遠江殿	小堀遠江守政一
7	藤堂泉殿屋敷	藤堂いつミ殿屋敷	藤堂和泉殿屋敷	藤堂和泉守高虎
8	京極丹後殿宿	京極丹後殿宿	京極丹後殿宿	京極丹後守高知
9	有馬玄蕃殿宿	有馬玄蕃殿宿	有馬玄蕃殿宿	有馬玄蕃頭豊氏
10	本田美濃殿宿	本田美濃殿宿	本田美濃殿宿	本多美濃守忠政
11	松平将監殿宿	松平将監殿宿	松平将監殿宿	松平右近将監成重
12	水日向殿宿	水の日向殿宿	水野日向殿宿	水野日向守勝成
13	松平下総殿宿	松平下総殿宿	松平下総殿宿	松平下総守忠明
14	岡部内膳殿宿	岡部内膳殿宿	岡部内膳殿宿	岡部内膳正長盛
15	松平周防殿宿	松平周防殿やと	松平周防殿宿	松平周防守康重
16	小笠原右近殿宿	小笠原右近殿宿	小笠原右近殿宿	小笠原右近大夫忠真
17	松平阿波殿宿	松平阿波殿宿	松平阿波殿宿	蜂須賀阿波守至鎮
18	浅野但馬殿宿	浅野但馬殿宿	浅野但馬殿宿	浅野但馬守長晟
19	脇坂中務殿宿	脇坂中務殿宿	脇坂中務殿宿	脇坂中務少輔安治
20	加藤肥後殿宿	加藤肥後殿宿	加藤肥後殿宿	加藤肥後守忠広
21	松平越中殿屋敷	松平越中殿やしき	松平越中殿宿	松平越中守定綱
22	森伊勢守	森伊勢守	森伊勢守	森（毛利）伊勢守高政
23	京極若狭殿宿	京極若狭殿宿	京極若狭殿宿	京極若狭守忠高
24	戸田左門殿宿	戸田左門殿宿	戸田左門殿宿	戸田左門氏鉄
25	永井信濃殿宿	永井信濃殿やと	永井信濃殿宿	永井信濃守尚政
26	かまふひた殿宿	—	かまふひた殿	蒲生飛騨守秀行
27	いこまさぬき殿宿	—	いこまさぬき殿宿	生駒讃岐守正俊
28	くは山いか殿宿	くは山いか殿宿	くは山いか殿宿	桑山伊賀守元晴
29	かなもりいつも	かなもりいつも	かなもりいつも殿やと	金森出雲守重頼
30	正宗殿	正宗殿	正宗殿	伊達陸奥守政宗
31	紀伊大納言殿御屋敷	紀伊大納言殿御屋敷	紀伊大納言殿御やしき	徳川権大納言頼宣
32	—	木下宮内殿下やしき	木下宮内殿下やしき	木下宮内少輔利房
33	—	うらく殿屋敷	うらく殿屋敷	織田長益（有楽斎）
34	—	もり殿屋敷	もり殿屋敷	毛利長門守秀就
35	—	堀尾山城殿宿	堀尾山城殿宿	堀尾山城守忠晴
36	—	ミとちうなこんどのやしき	ミとちうなこん殿やしき	松平権中納言頼房
37	松平（欠）殿宿	松平山城殿宿	松平山城殿宿	不詳
38	（欠）田上野殿宿	織田上野殿宿	織田上野殿宿	不詳
39	村上三右	村上三右	村上三右	村上三右衛門吉正
40	後藤庄五	後藤庄三	後藤庄三	後藤庄三郎
41	■ 左近殿宿	林 左近殿宿	林 左近殿宿	不詳

注1 表記は各絵図の記載にしたがった。

2 蜂須賀阿波守至鎮は慶長8年に叙任し、元和6年に死去。後嗣忠英の阿波守叙任は元和9年である。

3 京極丹後守高知は慶長5年丹後守、元和8年死去。後嗣高広の丹後守叙任は寛永2年である。

「都記」と「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」の集成図ともいえるべき京都図になっているといえよう。

2. 京屋敷・宿所からみた初期京都図の景観年代

(1) 記載情報の時間的重層性

絵図の作成（景観）年を推定する手がかりは大まかに言えば、図形や絵記号で表現された地物の変化と文字で記入された注記である。「都記」から「平安城東西南北町并之圖」までの3舗の絵図について言えば、「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」以降になって「中宮様下屋敷・新屋敷」が図形的にも文字注記にも記載されている。この時期の中宮とは徳川秀忠の娘・和子（後の東福門院）である。徳川和子が中宮になったのは寛永元年（1624）のことである。また、「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」の「内裏様」の東側に記載された「新屋敷」は寛永5（1628）年に中宮・徳川和子のために建設されたもので、寛永6年に退位した後水尾天皇の仙洞御所としても利用された⁽¹⁴⁾。「都記」では「内裏」とだけあって「内裏様」という表記ではなく、また「新屋敷」の表記もない。「都記」に記載された「内裏」は内裏だけでなく仙洞御所や院御所、公家屋敷まで含むいわば内裏域で、現在の公家町という表現に近い。これに対して「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」に描かれた内裏は天皇居所の内裏で、周辺の御所や公家屋敷を含めてとらえると、「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」・「平安城東西南北町并之図」の内裏域はかつての高台院屋敷を含む下立売通まで広がっており、形状の点でも「都記」とほぼ同一である。そして、その内裏域は寛永年間の「洛中絵図」（図2）⁽¹⁵⁾に記載された区画の形状ともほぼ一致する。以上の点から、「都記」以下の一連の板行京都図の刊行年は、寛永3年から寛永5年ごろまでに引き下げられることになる。しかし、それ以上の手がかりは見当たらない。

そこで、図中の京屋敷・宿所に記載された武家の没年や叙任年が判断の手がかりになってくる。「都記」に記載された京屋敷・宿所は、大名家でない3家を除けば33邸で、「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」以降になると、新たに5家の大名邸が加えられている。この33家あるいは38家の武家を没年・叙任年に基づいて整理していくと、①慶長17（1612）年以前、②元和6（1620）～寛永2（1625）年、③寛永3年以降という3つの時間的な層が含まれていることがわかる。①慶長17年以前というのは「蒲生飛驒守」の記載があることによる。蒲生飛驒守に該当する大名は蒲生氏郷、その子・蒲生秀行の二人である⁽¹⁶⁾。蒲生氏郷は豊臣期の大名で、文禄4（1596）年に没している⁽¹⁷⁾。「都記」以下の絵図群の作成が寛永期ごろと考えられている点から言えば、図中の「蒲生飛驒守」は慶長17年に没した蒲生秀行を指したものと考えられるべきであろう。

順不同になるが、③寛永3年以降というのは、「紀伊大納言」、「水戸中納言」の記載がある

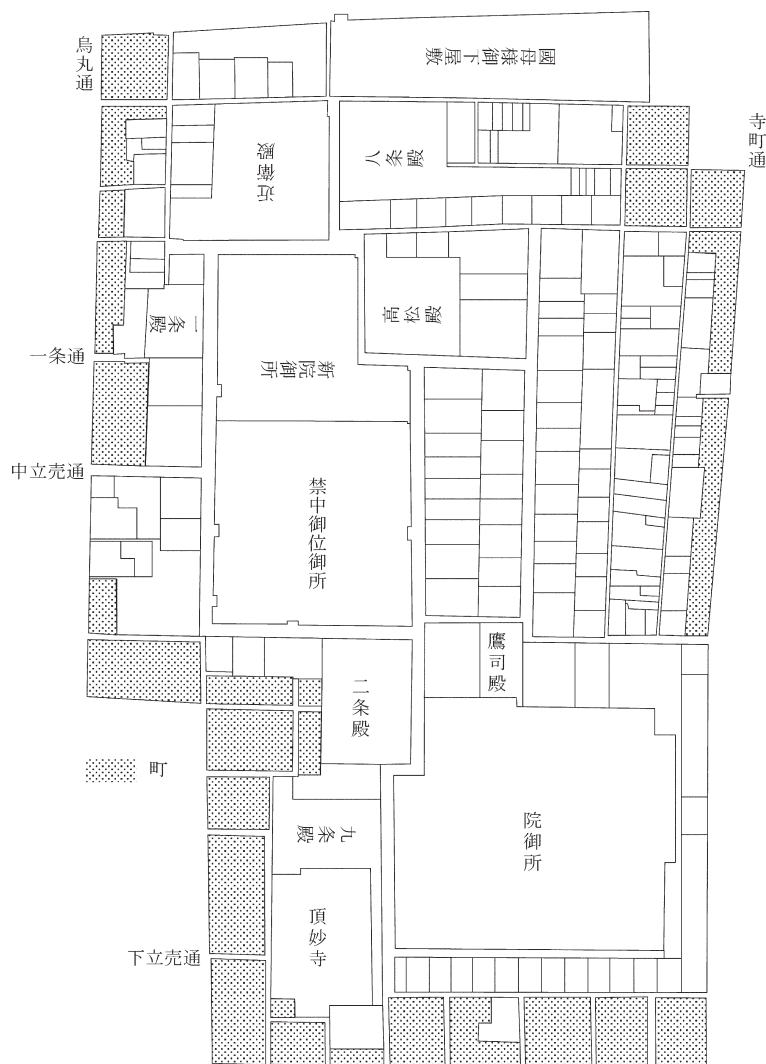


図2 寛永期の公家町
(『洛中絵図 寛永後萬治前』所収図に一部加筆)

ためである。紀伊大納言とは和歌山城主徳川頼宣を指している。徳川頼宣が紀州和歌山城主になったのは元和5（1619）年であり⁽¹⁸⁾、この時点から「紀伊」と表記することはできる。しかし、「大納言」という表記が可能になるのは寛永3年（1626）に権大納言に叙任した時からである⁽¹⁹⁾。また、「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」から記載される「水戸中納言」とは松平頼房を指している。松平頼房が権中納言に叙任したのは同じ寛永3年である⁽²⁰⁾。寛永3年以降に追加されたことが明白な記載はこの2例のほかには見いだせない。②元和6（16）～寛永2（1625）年を①と分けているのは、元和6年に板倉周防守重宗が板倉伊賀守勝重に代わって京都所司代に就任していることである⁽²¹⁾。「都記」以下の京都図は板倉伊賀守の宿所とは別

に「板倉周防殿」と2か所の「周防殿下屋敷」を記載している。板倉伊賀守の宿所は後に板倉家京屋敷となるが、「板倉周防殿」は明らかに京都所司代屋敷である。「板倉周防殿」と屋敷とも宿所とも示さず表記しているのはそのためであろう。また、「周防殿下屋敷」も京都所司代下屋敷である。

「都記」には大名の名の一部が欠字になっているものがある。その一つは「□田上野介」である。「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」以下の図ではこの欠字を補って「織田上野介」と記載している。織田上野介ならば、それは慶長19年(1614)7月に没した織田信包を指していることになる⁽²²⁾。しかし、官途名に着目すれば、織田上野介が生存していた慶長期終わりごろ、本多正純も「上野介」を名乗っている⁽²³⁾。「都記」以下の絵図では「本多」を「本田」と表記しているため、本来の記載は本多正純であったと考えることもできる。本多正純は元和7年(1621)に失脚して流罪になっており、姓の一部が欠字になっている理由も理解しやすくなるが、確証はない。もう一つは「松平(欠)殿宿」である。「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」以下の図ではこの欠字を補って「松平山城殿」と記載している。しかし、「都記」を見る限り「山城」と読むことは難しい。以上のような事情から、「□田上野介」および「松平(欠)殿宿」については考察対象から除外せざるを得ない。

(2) 近世初期京都図記載の京屋敷・宿所

「都記」に始まる一連の京都図には確かに慶長17年以前の情報が含まれている。しかし、確実な情報は「蒲生飛驒守」の唯一つであり、現存する絵図から慶長年間の京都を想定することは困難である。一方で、寛永元年から寛永3年の作成とされる「都記」は諸大名の京屋敷・宿所の焦点を当てたとき寛永元～3年の景観を描写しているといえるであろうか。「都記」が寛永元～3年の作成と考えられてきたのは、寛永3年の徳川家光の上洛と、家光に供奉する諸大名およびその家臣の上洛を念頭に置いたものである。将軍の上洛のともなれば、数多くの大名が上洛したはずである。しかし、「都記」や「平安城東西南北町并之圖」に記載された大名家は30家程度にとどまり、将軍の上洛に江戸から供奉してきた諸大名の京屋敷・宿所のほとんどが記載されていないのである。

江戸時代初期における大名上洛時の宿所については藤川昌樹が元和3(1617)年の福島家、元和3年・元和5年・寛永11(1634)年の毛利家の場合について検討している。それによれば、毛利家では元和年間に寺院寄宿であったものが寛永年間になって自己屋敷(京屋敷)の利用へと移行し、同時に小規模な京屋敷では家臣団の完全な収容が不可能であるため町屋敷に分散して家臣団を寄宿させていた⁽²⁴⁾。「都記」から「平安城東西南北町并之圖」までの3舗の都市図には「屋敷」の記載があるものの少数で、ほとんどが「宿」と表記されている。この毛利家の例に基づけば、寛永期というより元和期に近い状況である。近世初期におけるこうした京屋敷・宿所の状況は文禄4(1595)年の豊臣秀次の自害・聚楽第の破却を契機として、既存の京

屋敷を宿所と位置づけて残すことはあっても、京屋敷の伏見移転が進んだことと無縁ではない⁽²⁵⁾。元和期に入っても徳川家の京都における公的な拠点は伏見城であり、各大名の屋敷は伏見に構えられていた。

江戸時代初期の将軍の上洛は元和3年・元和5年・元和9年・寛永3年・寛永11年の5回である。「都記」に記載された京屋敷・宿所は、大名家でない武家、慶長年間に没した大名、欠字で不確定な2家を除けば31邸であり、「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」以降に加えられた大名家5家を加えれば36邸である。このうち、寛永11年（1634）の時点で当該年の領主と絵図中の記載が一致しないか、廃絶になっている大名家は13家にのぼる⁽²⁶⁾。したがって、「都記」以下の一連の絵図群は寛永11年の将軍上洛とはほとんど無関係であるといっていよい。

「都記」以下の一連の絵図群に寛永3年の徳川秀忠・家光上洛に関係する記事があることはすでに確認しているが、あらためて「大猷殿実記」寛永3年5月の徳川秀忠上洛、同年7月の徳川家光上洛、同年9月の後水尾天皇の二条城行幸に供奉した諸大名を見てみると、紀伊大納言・水戸中納言を含めて「都記」記載の大名31家のすべてを見いだすことができる⁽²⁷⁾。しかし、記載された大名数は上洛した大名数に比べあまりにも少なく、寛永3年の徳川秀忠・家光の上洛に合わせて新たに記載された、あるいは修正されたことが確認できるのは、紀伊大納言と水戸中納言の2人だけである。したがって、寛永3年の将軍上洛に合わせて内容を刷新し、改めて刊行された京都図とは言い難い。

寛永3年の将軍上洛に合わせて新たに記載されたことが確認できるのが紀伊大納言と水戸中納言の2人だけであったということは、「都記」が紀伊大納言と水戸中納言の2名を加えることで十分に寛永3年の将軍上洛に対応できるものであったということである。こうした部分的修正という対応は文字注記だけではない。大塚の指摘にもあるように、図中の二条城は寛永年間初期に拡大されたものである。したがって、現存する「都記」は確かに寛永3年の将軍上洛を契機にしてそれ以降に内容を修正して刊行されたものであり、「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」や「平安城東西南北町并之圖」もその内容を継承した絵図であることは間違いない。しかし、拡張された二条城や紀伊大納言・水戸中納言を除けば、記載された大名は寛永3年時点のものとは言い難く、また慶長期の京都の景観とは考えられない以上、「都記」以下の絵図に記載された京屋敷や宿所は、元和6（1620）～寛永2（1625）年の状況を基本にしていると考えることが妥当であろう。

3. 初期京都図と朝廷

(1) 徳川和子の入内

「都記」以下の京都図の内容は元和6（1620）～寛永2（1625）年の6年間ものを基本にしているが、そこからさらに絞り込むことができる。修正された紀伊大納言・水戸中納言は元和

6年の時点ではそれぞれ権中納言・右近衛権少将である⁽²⁸⁾。この二人を含めた36大名のすべてがそろうのは慶長18(1613)年から元和6年の間である。それに元和6年に桑山伊賀守(元晴)・松平阿波守(蜂須賀至鎮)が死去し⁽²⁹⁾。これに板倉周防守重宗の京都所司代就任を加えれば、「都記」以下の京都図の記載内容は元和6年にしほりこめるのである。

元和6年は朝廷にとっても江戸幕府にとっても徳川和子入内という大きな出来事があった年である。徳川和子の入内については『義演准后日記』慶長13(1608)年9月26日条⁽³⁰⁾や慶長17(1612)年9月22日条⁽³¹⁾、さらに『駿府記』慶長19(1614)年4月20日条、『當代記』慶長19年4月条⁽³²⁾に散見している。しかし、徳川和子の入内に向けての動きが具体的に把握できるようになるのは、京都所司代・板倉伊賀守勝重が伝奏・広橋兼勝に徳川和子入内準備について議した元和4年6月21日以降である⁽³³⁾。同年9月には女御御殿造営の奉行に小堀遠江守政一・五味豊直が任じられている⁽³⁴⁾。以後、徳川和子の江戸発駕(元和6年5月8日)⁽³⁵⁾までにこの件に関係した人物として記録に現れるのは、藤堂高虎(元和5年9月⁽³⁶⁾・元和6年2月⁽³⁷⁾)、京板倉周防守重宗(元和6年4月)の2人である⁽³⁸⁾。

元和6年5月28日に京都に到着した徳川和子は、6月18日に入内した。この入内の行列に加わり供奉した武家は「台徳院殿御実記」によれば、以下の22名である⁽³⁹⁾。

板倉周防守重宗、松平和泉守乗寿、松平甲斐守忠良、松平紀伊守家信、菅沼織部正定芳、板倉内膳正重昌、本多豊後守康紀、小笠原右近大夫忠真、松平山城守忠国、松平河内守定行、松平周防守康重、三宅越後守康信、岡部内膳正長盛、松平右衛門大夫正綱、土井大炊頭利勝、松平主殿頭忠利、大沢少将基宥⁽⁴⁰⁾、酒井雅楽頭忠世、本多美濃守忠政、井伊掃部頭直孝、本多縫殿助俊次、松平下総守忠明

また、同日の行列道筋の警護に当たった武家は、本多美濃守忠政、本多甲斐守政朝(本多忠政の子)、松平伊豆守信吉、岡部内膳正長盛、松平周防守康重、松平下総守忠明の6名であった⁽⁴¹⁾。このうち松平山城守忠国を記載せず、松平安房守とする資料も少なくない。しかし、松平安房守の記載は、辻警護を担当した山城守忠国の父・松平伊豆守信吉の誤りであると考えられている⁽⁴²⁾。また、「台徳院殿御実記」元和6年5月8日条によれば徳川和子の上洛を供奉する大名は20人であるが⁽⁴³⁾、上洛の道筋にあたる伊勢長島の城主菅沼織部正定芳にも供奉が命じられている⁽⁴⁴⁾。上記のうち大沢少将は旗本であるため除き、途中から供奉した菅沼定芳を加えれば、徳川和子を供奉した大名は20名になる。

徳川和子入内の際に供奉した諸大名の中で下線を付した大名は「都記」から「平安城東西南北町并之圖」までの京都図に宿所が記載された大名で、その数は10名である(表2)。これに供奉はなかったものの朝廷との協議等に関わった板倉勝重、藤堂高虎、女御御殿の作事を担当した小堀政一を加えれば、徳川和子入内に関わった者は13名になる。「都記」に記載された大名の半数近くが徳川和子の入内に直接的に関わっていたことになる。

（2）朝廷の復興と板行都市図

元和年間に限って言えば、元和3年・元和5年・元和9年に行われた将軍上洛は「都記」刊行とは無関係で、代わって刊行の契機として浮上したのは徳川和子の入内であった。そこで注目されるのは、「都記」の北限が一条通であること、そして「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」の北限が上立売通になっていることである。「都記」が一条通を北限にしていることについては、『拾芥抄』の東西京図を参照し、あるいは『延喜式』左京図に倣い平安京の北京極を北限としたなどの見解がすでに示されている⁽⁴⁵⁾。「都記」が平安京を強く意識したものであることは認めてよい。しかし、ここで問うべきことはなぜそこを北限とし、なぜ「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」は北限を北上させたのか、という点である。

「都記」から始まる17世紀初期の京都図は徐々に記載範囲を広げ、洛外を含む図に変化していった。そうした変化の中で京都図の北限もまた北へ移動したという理解もあろう。しかし、そうした理解では「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」がなぜ上立売通を北限として選択したのかという点が説明できない。「都記」以下の京都図が徳川和子の入内を契機に刊行されたと考えられる以上、「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」に記載された「中宮様下屋敷」に注目しておくべきであろう。「都記」が一条通を北限としたために内裏城さえ描き切れていないのに対して、「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」は寛永元年（1624）以降の内裏域、中宮下屋敷、新御殿（仙洞御所）を図の中に収めているのである。

「都記」から始まる京都図は、景観的には寛永期でありながら、諸大名の京屋敷・宿所は元和年間のものをそのまま利用していた。そのため、元和6年の徳川和子の入内と、寛永3年の徳川秀忠・家光の上洛、それに引き続いて行われた後水尾天皇の二条城行幸、中宮和子の行啓という二つの出来事に対応できる図になっていた。この二つの出来事にともに関わっているのは徳川和子である。「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」とそれに続く「平安城東西南北町并之圖」は中宮下屋敷や寛永5年建設の新御殿を描くことによって徳川和子をめぐる二つの出来事を視覚化したといえることができる。しかし、徳川家側に視点を置くと「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」に先行する「都記」が北限を一条通に設定した意味は説明できない。それゆえ、徳川秀忠の娘・和子というより後水尾天皇の女御、そして中宮である和子というとらえ方をする方が適切であろう。

「都記」から「平安城東西南北町并之圖」までの京都図に慶長17年（1612）以前の情報が含まれていることはすでに述べたことであるが、それは「都記」に先行する京都図が存在した可能性を示唆している⁽⁴⁶⁾。徳川家による内裏等の修築・新造事業は準備を含めれば慶長10年（1605）に始まっている⁽⁴⁷⁾。禁裏の増築・仙洞御所の新造が始まったのは慶長11年7月で⁽⁴⁸⁾、引き続いて慶長16年から新たに禁裏造営が始まった⁽⁴⁹⁾。先にふれた蒲生飛騨守秀行も慶長16年から始まる禁裏普請や築地の築造に加わり、資料にその名を留めている⁽⁵⁰⁾。織田信長・豊臣秀吉による内裏修築もあったが、徳川政権下の慶長期は禁裏・仙洞御所だけでなく公家屋敷

を含めて大規模な工事が続き、いわゆる公家町が整備・拡張され様相を一変させつつあった時期なのである。

その慶長末期に徳川和子の入内が構想され、元和6年に実現する過程で、若干の御殿築造が追加的に行われている。この間に禁中並公家諸法度が発布されており、一連の工事は徳川和子の入内とともに江戸幕府による朝廷管理の強化と江戸幕府の権威・権力の確立を意図したものである。しかし、京都を生活の場としてきた人々にとっては、次々と新造されていく殿舎群は衰微の激しかった朝廷（天皇）の権威回復の実現とも見え、朝廷（天皇）権威回復の視覚的表現としての新たな都市景観の出現は近世初期京都の人びとに新たな都（平安城）の出現を印象づけたに違いない。

4. 「平安京」という地域意識

(1) 初期洛中洛外図屏風のなかの「平安京」

京都という都市空間を分節する境界として一条通を使用したのは「都記」が最初ではない。16世紀に描かれた初期洛中洛外図屏風にすでにそれが現れている。図3は現存最古と言われる洛中洛外図屏風・歴博甲本のトレース略図である。右隻は東山（横川・比叡山～東福寺）とその山麓に分布する寺社を遠景にして、左隻は北山・西山（上賀茂～松尾）と寺社を背景にして季節ごとの行事やさまざまな人々の営みが描かれている。一般的に16世紀中に作成された洛中洛外図は右隻に内裏を配し、左隻に室町幕府の将軍御所や細川管領邸を描いて対照させる構図をもつところに大きな特徴がある。そして、右隻では内裏に連なるように、左隻では室町幕府将軍御所や管領邸に連なって京都の町並が描かれている。この左隻・右隻に描かれた町並を分けているのが一条通である。

一条通以南を描く右隻の町並はほとんどが下京であり、一条通以北を描く左隻の町並は確かに上京である。このことから右隻を下京隻、左隻を上京隻と記述している出版物も多い⁽⁵¹⁾。上京隻・下京隻という表現は、左右の対照性を表現するうえでは理解しやすいものである。しかし、それによって一条通が境界になっていること、そして一条通が境界として選択された意味が議論の俎上に上がることはこれまでなかった。初期洛中洛外図の右隻を見ると東山が北から南へ、左隻の北山・西山もやはり北から南へと描かれて、16世紀の京都市街を取り囲む背景になっている。この背景となった山々や寺社を通して両隻の東西の位置関係、そして右隻・左隻それぞれの中で南北の位置関係が視覚化され、洛中洛外図屏風に描かれたさまざまな地物の位置、方位観を決定する画面上のフレームになっている。一方、中世京都の町並は上京・下京の呼称が示す通り概ね南北の位置関係にある。第二定型洛中洛外図屏風は初期洛中洛外図屏風に描かれた背景と方位観を踏襲し、それに適合させるように京都の町並を含めて東西に分割し、全体として違和感のない画面をつくりあげているが、それに比べ初期洛中洛外図屏風では背景

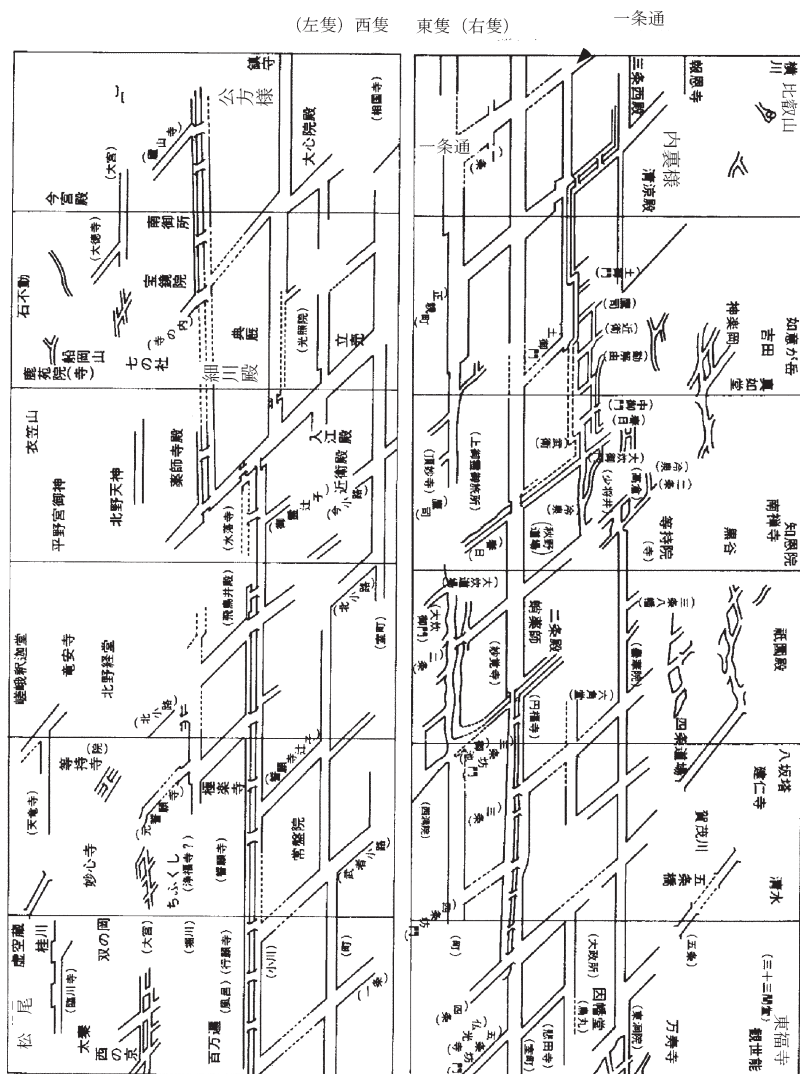


図3 洛中洛外図屏風・歴博甲本が描く京都
 (『日本都市史入門Ⅰ 空間』都市史図習所収図に加筆)

と京都市街の位地関係に齟齬が生じている。南北に連なる町並を二分して一方を東（右）の隻に、他方を西（左）の隻に配置しているため、初期洛中洛外図屏風では南北に連なる京都の市街が画面上では東西に連なって広がっているかのように見え、二つに分割された市街の位置関係が置き換えられているのである（図3）。

一条通はかつての平安京の北京極であった。したがって、東西に配置された京都市街の北端が一条通付近に設定された時、京都の町並はまるで平安京を再現したような姿になって現れてくる。初期洛中洛外図屏風が南北に連なる京都の町並を東西に配して一条通を北限に設定したのは、京都がかつての平安京の地であったこと、平安京を継承した正当な「都」であること、

あるいはそうした地に生きている自負を呼び起こすこと、そのような意図のある選択ではなかったかと思われる。

(2) 「平安京」という地域意識とその変化

一条通を市街の北限に置いて刊行された京都図は、近世初期の京都市街の広がりとは大きくかけ離れている。高橋正意が切図として「都記」を考証した⁽⁵²⁾のもそのためであろう。しかし、現存する「都記」に連続する図は未だに確認できておらず、現在では「都記」を切図のうちの一舗と考える研究者はおそらくいない。そのため、現存する「都記」一舗で京都図として完成したものとすると、「都記」以下の一連の都市図は、地図の実用性が大きく損なわれることを十分に認識しながらあるいは実用性を考慮せずに刊行されたと考えざるを得ない。地図の実用性の毀損あるいは無視という点で、「都記」やそれに続く近世初期の京都図は異例な都市図であるといわなければならない。

実用性を犠牲にしてまで「都記」を含む一連の都市図を刊行するには、上洛した武士たちのための町名便覧といった実用とは異なる刊行目的があったと考えるのが妥当であろう。初期洛中洛外図屏風では一条通を境界として用いたことに作成者たちの意図が読み取れる。それと同様に、「都記」も一条通を都市空間分節の境界として用いたことに作成者たちの意図が込められていると考えることができる。

初期洛中洛外図屏風とは異なり、徹底して「平安京」の外を排除しているところに「都記」の大きな特徴がある。初期洛中洛外図屏風が描いた左隻（西）の町並さえ「都記」は排除しているのである。実用性を犠牲にして近世初期の京都市街の上にかつての平安京左京域の広がりを重ね合せて刊行された「都記」からは、江戸時代初期の「京」ではなく、唯一旧左京域だけが「平安京」からの歴史を受け継ぐ都であるという強烈なメッセージを読み取ることができる。そこには、16世紀中ごろまで衰微していた朝廷権威の復興、景観的には内裏をはじめとする殿舎の新造や公家町の整備、そして京都市街の急速な拡大といった事態を目の当たりにして、旧平安京・左京域をベースにした共通意識をもつことで他者と区別し、自らのアイデンティティを確立しようとする人々の姿が見えてくるのである。

しかし、「都記」と「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」以下の図にみられる地域意識が全く同一であるとは考えにくい。「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」が「中宮様下屋敷」や「新御殿」を描き、市街北限を上立売通まで北上させたこと、さらに鴨川を越えて洛東の町並をえがいたことなどは、「平安京（左京）」の外を排除するという「都記」の態度から逸脱したものである。こうした変化の兆しは現存する「都記」が徳川和子入内という出来事を背景に刊行されたと考えられる点にすでに表れている。このことは、「平安京（左京）」の外を排除するという意識が形を変えながら維持されつつ、元和期から寛永期にかけて、「平安京（左京）」から徳川政権下の「京」へと、徐々に地域意識が変化し始めていたことを示すものであろう。現

存する「都記」が元和期から寛永期の状況を映していたことを考えると、強烈な「平安京（左京）」への意識が最高潮に達した時期は慶長期であったのかもしれない。

おわりに

17世紀初期の京都図「都記」とそれに続く「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」・「平安城東西南北町并之圖」は当該期の京都市街の一部分を切り取って刊行された異例な都市図である、地図の実用性を犠牲にした異様さの中に、17世紀初期京都における地域意識を読み取ることを目的に本稿を進めてきた。そこで明らかになった点を整理すると、大きく地図史的な検討結果と京都図に現れた地域意識とその変化に関する検討結果に分けることができる。

〔地図史的検討結果〕

- ① 寛永元～3年に刊行されたと考えられてきた現存の「都記」は公家町を合わせて描かれた「内裏」の形状が寛永5年造営の「新御殿」を含んでいることから、寛永5～6年以降の刊行と考えられること。
- ② 記載された諸大名の京屋敷・宿所から判断する限りでは、現存する「都記」には慶長17年以前、元和6年、寛永3年以降という3つの時間の層があること。
- ③ 現存する「都記」にはそれに先行する慶長図があった可能性が否定できないこと。
- ④ 現存する「都記」は元和6年の徳川和子入内時期の状況を主な内容とし、寛永3年の将軍上洛に際して一部を修正して刊行されたと考えられること。

〔地域意識〕

- ⑤ 一条通で都市空間を分節することは初期洛中洛外図屏風にすでにみられ、一条通が「平安京」を象徴していること。
- ⑥ 「都記」は一条通を市街の北限とするだけでなく、「平安京」を旧左京域に凝縮し、「平安京」の外を排除している点で、実用性に重点を置いたものではなく、初期洛中洛外図屏風以上に「平安京（左京）」を強く意識していたと考えられること。
- ⑦ 「平安京」の外を排除した「都記」からは、17世紀初期に内裏域が復興し、また京都市街が急速に拡大していったという実態と、その中で旧左京域という場所を共有することで他者に対するアイデンティティをかたちづくろうとしていたことが読み取れること。
- ⑧ 「都記」に続く17世紀初期の京都図は、旧左京域への強い意識を維持しながら、それを逸脱した図になっており、「都記」にうかがえた「平安京」から徳川政権下の「京」への地域意識の変化をより明確に示すものになっていること。

本稿の地域意識の検討は都市図に見られる表現上の特徴をとらえて進めたものである。慶長期後半からの京都の都市的变化をその背景として取り扱ってはいるが、同時期の文字

資料、とくに板行京都図の主要な需要者層と思われる人々の認識を知りうる資料を用いての検証には至っていない。慶長期から元和期にかけてのそうした資料を筆者は未だに見出せていないためである。この点は、今後の課題としておきたい。

〔注〕

- (1) 例えば、17世紀前半のものでは正保城絵図を挙げることができる。城絵図とは呼んでいるが、城下町絵図と呼ぶ方が適当である。
- (2) 矢守一彦 (1974) 『都市図の歴史 日本編』、講談社、141～149頁。矢守一彦 (1984) 『地図と風景』、筑摩書房、181～202頁。金田章裕・上杉和央 (2012) 『日本地図史』、吉川弘文館、149～164頁。
- (3) 小野寺淳「絵図に描かれた自然環境―出羽国絵図の植生表現を例に―」、歴史地理学172、1995年、21頁。
- (4) 佐々木千佳・芳賀京子『都市を描く―東西文化にみる地図と景観図』、東北大学出版会、2010、iv頁。
- (5) 「都記」の図版・説明については、以下を参照。藤田元春 (1930) 『都市研究 平安京變遷史 附古地圖集』、スズカケ出版部。大塚隆編 (1994) 『慶長 昭和 京都地図集成』、柏書房。京都大学大学院文学研究科地理学教室・京都大学総合博物館編 (2007) 『地図出版の四百年 京都日本 世界』、ナカニシヤ出版。また、「都記」に関する概説は前掲のほか、以下の文献を参照。秋岡武次郎 (1955) 『日本地図史』、河出書房、197～203頁 (復刻版、ミュージアム図書編集部編・秋岡武次郎 (1997) 『日本地図史 新版』、ミュージアム図書)。秋岡武次郎 (1971) 「日本地図作成史」(秋岡武次郎『日本地図集成』、鹿島研究所出版会、所収) 75～76頁。大塚隆 (1994) 「京古地図史抄」(大塚隆編『慶長 昭和 京都地図集成』、柏書房、所収)、138～139頁。
- (6) 前掲(5)、秋岡武次郎 (1955)、秋岡武次郎 (1971)、大塚隆 (1994)。
- (7) 「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」の図版は、秋岡武次郎 (1971) 『日本地図集成』、鹿島研究所出版会。
- (8) 前掲(5)。
- (9) 「平安城東西南北町并之圖」の図版は、秋岡武次郎 (1971) 『日本地図集成』、鹿島研究所出版会、京を語る会「平安城東西南北町並みの図 (寛永十八年以前)」(復刻)。
- (10) 大塚隆はとくに触れていないが、高瀬川舟入は七条内浜部分に限って記載されている。
- (11) 前掲(5)、大塚隆 (1994)。
- (12) 前掲(5)、大塚隆 (1994)。
- (13) 「都記 写」の図版は、秋岡武次郎 (1971) 『日本地図集成』、鹿島研究所出版会。
- (14) 湯口誠一「近世内裏沿革略圖」(大塚隆 (1981) 『京都圖總目錄』(日本書誌学大系18)、青裳堂書店、所収)、57頁。
- (15) 『洛中繪圖 寛永後萬治前』、臨川書店。
- (16) 国史大辞典編纂委員会編 (1983) 『國史大辭典』蒲生氏郷条、吉川弘文館。
- (17) 国史大辞典編纂委員会編 (1983) 『國史大辭典』蒲生秀行条。吉川弘文館。
- (18) 国史大系刊行会編『新訂増補 徳川実記第二篇』(国史大系第三十九卷)、「台徳院殿実記」元和5年7月19日条。
- (19) 前掲(18)、「大猷院殿実記」寛永3年8月19日条。
- (20) 前掲(19)。
- (21) 板倉勝重と板倉重宗の京都所司交代時期については、元和5年とするものと元和6年とするものがある。現在は『寛政重修諸家譜』にしたがって元和6年とするのが一般的である。本稿もこれに従う。

- (22) 『新訂寛政重修諸家譜 第八』、続群書類従完成会、1965、188頁。慶長末期の織田信包の官途名は、上野介と記したものと民部少輔とするものとがある。
- (23) 本多正純の上野介叙任は慶長6（1601）年である。（『新訂寛政重修諸家譜 第十一』、続群書類従完成会、1965、292頁。）
- (24) 藤川昌樹（1992）「近世初期長州藩上洛供奉における滞在先とその構成：近世武家集団の居住形態に関する研究1」、日本建築学会計画系論文報告集（432）、131～139頁。藤川昌樹（1990）「元和三年福島正則上洛供奉における寄宿形態」、日本建築学会学術講演梗概集 F、都市計画、建築経済・住宅問題、建築歴史・意匠、901～902頁。
- (25) 横田冬彦（2001）「豊臣政権と首都」（日本史研究会編『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城』、文理閣）27～32頁。
- (26) 寛永11年時の上洛大名に該当しないのは桑山伊賀守、生駒讃岐守、板倉伊賀守、脇坂中務少輔、森伊勢守、藤堂和泉守、本田（本多）美濃守、浅野但馬守、岡部内膳正、松平周防守、水野日向守、織田有楽斎、木下宮内少輔である。
- (27) 前掲(18)、「大猷院殿実記」寛永3年9月6日条。
- (28) 徳川頼宣の権中納言叙任については、前掲(18)、元和3年7月19日条。また、徳川頼房の叙任については前掲(18)、慶長16年3月26日条。
- (29) 桑山元晴の死去は元和6年7月20日（前掲(18)、元和6年7月20日条）、蜂須賀至鎮の死去は元和6年1月26日（前掲(18)、元和6年1月26日条）。
- (30) 東京大学編（1904）『大日本史料 第十二編五』、慶長13年9月26日条。
- (31) 東京大学編（1907）『大日本史料 第十二編十』、慶長17年9月22日条。
- (32) 東京大学編（1909）『大日本史料 第十二編十三』、慶長19年4月条。
- (33) 東京大学編（1929）『大日本史料 第十二編二十九』、元和4年6月21日条。
- (34) 前掲(33)、元和4年9月条。
- (35) 東京大学編（1938）『大日本史料 第十二編三十三』、元和6年5月8日条。
- (36) 東京大学編（1933）『大日本史料 第十二編三十一』、元和5年9月条。
- (37) 前掲(35)、元和6年2月条。
- (38) 前掲(35)、元和6年4月条。
- (39) 前掲(18)、元和6年6月18日条。
- (40) 前掲(39)では「大沢基宥」と表記するが、『新訂寛政重修諸家譜 第十二』収載の家譜では「基宿（もといえ）」と記載している。
- (41) 前掲(39)。
- (42) 前掲(35)、元和6年6月18日条。
- (43) 前掲(39)、元和6年5月8日条。
- (44) 前掲(39)、元和6年5月28日条。
- (45) 前掲(5)、秋岡武次郎（1955）、大塚隆（1994）。
- (46) 大塚隆は前掲(5)に挙げた「京古絵図史抄」の中で明治28（1895）年に刊行された京都市参事会編『平安通志』の京都古図目録に「板本、大澤敬之所有、大畧慶長図ニ同シ」と解説がついた「元和年間京圖」がある点に触れ、「元和年間京圖」が明治34年（1901）『京都帝國大學圖書館創立二周年紀念展覧会出品目録』（大塚隆（1981）『京都圖總目録』（日本書誌学大系18）、青裳堂書店、に資料として掲載）に「高橋氏大澤氏亦之ヲ蔵セリ」とある「平安城東西南北町並之圖」であると理解し、「平安城東西南北町並之圖」が同目録中で寛永3～17年の間に刻されたものであると判断されたことに基づいて、大澤氏所蔵の「元和年間京圖」はより新しい地図であったと述べている。この大塚の見解は『平安通志』の大澤所蔵「元和年間京圖」を同氏出品の「平安城東西南北町並之圖」とみなす際に、大澤の名に傍点を打ち強調していることから、「平安城東西南北町並之圖」の所蔵者名に大澤の名があり、「元和年間京図」の出品者ではなかったことを根拠としたと考えられるのである。

しかし、この判断には大きな問題点がある。「元和年間京圖」や「(寛永) 平安町古圖」という図題は明らかに仮の題である。一方、「平安城東西南北町並之圖」やそれに先行した「平安城本立賣ヨリ九條迄町並之圖」は図幅の天に当該の図題が大きく記載されている。明白な図題があるにもかかわらず、「平安城東西南北町並之圖」に「元和年間京圖」のように、仮の題をつけることはない。また、同出品目録の「(寛永) 平安町古圖」には「本圖題名ナシ。(中略) 都記ノ二字アリ。高橋正意氏ノ考證ニ由レバ、此圖ノ方世上一派ノ人々ノ稱スル元和版ヨリ更ニ古シ、蓋シ最古ノ板本ナリト云フ」という解説があり、「平安城東西南北町並之圖」の解説文には「前ニ所謂ユル元和板ナリ」と記載されている。「(寛永) 平安町古圖」解説文の「此圖ノ方世上一派ノ人々ノ稱スル元和版ヨリ更ニ古シ」の部分は言葉を補って記せば「此圖ノ方(ハ)、世上一派ノ人々ノ稱スル元和版(ノ圖)ヨリ更ニ古シ」であり、「(寛永) 平安町古圖」が「世上一派ノ人々ノ稱スル元和版」すなわち「所謂ユル元和板」の「平安城東西南北町並之圖」より古い絵図であると言っているだけである。結局、同出品目録では「(寛永) 平安町古圖」と『平安通志』の「元和年間京圖」との関係を明言してはいないが、「元和年間京圖」に図題がないこと、『京都帝國大學圖書館創立二周年紀念展覧会出品目録』では「(寛永) 平安町古圖」としてはいるが、それよりも新しい「平安城東西南北町並之圖」が寛永3～17年の間に刻されたと考えられていることなどから、「元和年間京圖」と「(寛永) 平安町古圖」が同一のものである可能性が高い。なお、ここでは「平安城東西南北町并之圖」ではなく、「平安城東西南北町並之圖」と記述した。これは「京古絵図史抄」で大塚が用いた表現にしたがったためである。

- (47) 東京帝國大學編 (1902) 『大日本史料 第十二編三』、慶長10年8月21日条。
- (48) 東京帝國大學編 (1903) 『大日本史料 第十二編四』、慶長11年7月2日条。
- (49) 東京帝國大學編 (1906) 『大日本史料 第十二編八』、慶長16年3是月条。
- (50) 前掲(49)、「禁裏御普請帳」。また、前掲(49)、慶長17年12月11日条。
- (51) 例えば、高橋康夫・吉田伸之編 (1989) 『日本都市史入門Ⅰ 空間』、東京大学出版会、京都国立博物館1994『平安建都千二百年記念 特別展覧会 都の形象 洛中・洛外の世界』、など。「上京隻・下京隻」という呼び方について、小島道裕は「上京隻」・「下京隻」という言い方は内容的に適当ではなく、『東隻』『西隻』という言い方が一番客観的で混乱がないと思う」と述べている。小島道裕 (2009) 『描かれた戦国の京都 洛中洛外図屏風を読む』、吉川弘文館、7頁。
- (52) 『京都帝國大學圖書館創立二周年紀念展覧会出品目録』・「(寛永) 平安町古圖」解説文 (大塚隆 (1981) 『京都圖總目録』(日本書誌学大系18)、青裳堂書店、所収)、8頁。

(わたなべ ひでかず 歴史文化学科)

2016年11月15日受理